

律令時代の片上

その5 (H25.6月号掲載)

大化の改新後、中央集権体制の流れが加速し奈良時代には最盛期を迎えます。ひらたく言うと国家による人民統制が行き届いた時代となりました。この時代を一般に律令時代と呼びます。この頃の越前は北陸道諸国統制の要として大国に位置付けられ、渤海国との外交窓口になるなど重要な存在になっていました。

さて、奈良時代の片上一帯は丹生郡に属していましたが、後に新設された今立郡に属することになります。今立郡は9郷から構成され、「勝戸」とよばれる郷に片上は含まれていたようです。乙坂今北町内には「蔵ノ町」という字名が残っており、郷で収穫された穀物を収納した倉が存在したのかもしれませんが。

当時の人々の生活はどうでしょう。重税が課され楽な生活ではなかったことが万葉集の歌からうかがえます。郷から都の労役に従事した人々もかなりいたはずで、かたや大規模な農地改良が実施され(条里制)、今に残る農村の原風景を形作ったのもこの時代でした。千年以上前の人々の苦労によって今の風景が出来たと思うとなんだか感慨深いですね。

参考 青木豊昭「文殊山とかたかみ」

(文化課 深川義之)

